

## 騎馬虎狩文鍍金銀製皿の王侯の冠考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田辺, 勝美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1588">http://hdl.handle.net/2297/1588</a>

# 騎馬虎狩文鍍金銀製皿の王侯の冠考

## — 中央アジアにおけるアナーヒター女神信仰の浸透 —

田 辺 勝 美

### はじめに

筆者は本稿よりも先に脱稿した拙論「王侯騎馬虎狩文鍍金銀製皿に関する一考察」において、クシャノ・ササン朝(Kushano-Sasanian)で制作されたと思われる鍍金銀製皿(図 1)に描写された虎を狩る王侯について、クシャノ・ササン朝の初代の国王アルダシール 1 世(230-245?)ないし第二代目のパーローズ 1 世(245-270?)或いは両王の関係者(王子)の姿を再現した蓋然性を示唆した(田辺 1999 年、『国華』掲載予定)。これは、これら二人の国王が発行した銅貨に刻印された国王の王冠形式がこの銀製皿の王侯の平たい冠(図 2)に類似している点を根拠の一つにした結論に他ならない。また、この銀製皿がクシャノ・ササン朝の工房で制作されたことは、そこに描写された 2 頭の虎が中央アジアに今世紀半ばまで生息していたいわゆる「カスビ虎」(*panthera tigris virgata Matschie*)であることから間違いない。更に、上述した両王の銅貨の肖像に見られる冠の形式をその後精査したところ、アルダシール 1 世の王冠形式は一見「平たい冠」のように見えるが実はそうではなく、三つの矢狭間からなる城壁冠であることが判明したので、パーローズ 1 世一人に候補者を絞ることが妥当となった(Lukonin 1967, fig.1: Cribb 1990, pl.III-14, 15, 16; Göbl 1993, pl.64-nos.832, 836)。パーローズ 1 世は金貨ではティアラ冠(円錐形)と獅子頭冠、銅貨では 2-3 種類の「平たい冠」を採用している(Cribb 1990, pls.I-1, 2, IV-31, 32, 33)。それゆえ、上述した銀器の王侯の「平たい冠」の形式が若干、銅貨に描写されたパーローズ 1 世の王冠と異なっても、この国王を描写した蓋然性が極めて大きいといえるのである。すなわち、王冠形式の比較による国王の特定は、形式の比較を厳密に行う必要はないのである。おおよそ似ているという事実で十分である。この様な法則は摩崖浮彫や狩猟文銀製皿に描写されたササン朝の国王の王冠についても適用できると思う。

一方、問題の平たい王冠形式そのものには、国王ないし王侯の比定とは関係なく極めて重要な宗教史的な意義が秘められているように思われる。すなわち、中央アジアにおけるナナー女神とアナーヒター女神、大地の女神アルマイティ・シャンドウラーマタ(Armaiti=Sshandrāmata)との同一論、或いはその否定論に関係すると思われるのである(Azarpay 1976; 武内 1998)。筆者の推定によれば、この平たい王冠形式はアナーヒター女神を象徴している蓋然性が大きいのである。このようなわけで筆者が本稿で問題とするのは、クシャノ・ササン朝の国王や王家の人々が、ゾロアスター教の代表的な神であるアナーヒター女神(『ヤシュト』書第 5 節アーバン・ヤシュトに詳しい)に対してどのように対応したかという点である。というのは、クシャノ・ササン朝の版図(バクトリア=トハレスタン、マルギアナ、カプリスタン、ガンダーラなど)には、当地を支配した前代のクシャン朝の代表的な女神であったアルドクショー、ナナーの両女神に対する厚い信仰が存続していたと推定されるからである(クシャン朝コインの裏面に刻印された両女神像参照)。また、クシャン朝の代表的な男性神であったウエーショー(OHPO)がヴァルザーヴァンド・ヤザドー(VARZAVAND-YAZADO、高位・高所の神)という名称でクシャノ・ササン朝のコインの裏面に図像面で殆ど変更なくそのままの姿で終始刻印されている事実が存在する(田辺 1992: Tanabe 1991/92)。このように、クシャン朝の宗教の影響・痕跡が顕著な地域にササン朝の征服・

統治を契機としてアナーヒター女神の信仰が浸透したか否か、という問題がまず想起されよう。さらに、浸透したとすればその結果、アナーヒター女神がこれらクシャノ朝系の両女神或いはその中の一人と同一視され、両女神ないしその中の一人と習合していなかったか否か、という複雑で微妙な問題が存在しよう。これらの問題を解く鍵の一つは、クシャノ・ササン朝の国王が発行した金貨と銅貨（比較的少ないが銀貨）に刻印された国王や女神の冠の形式にあるのではないかと思う。以下において、クシャノ・ササン朝及びササン朝のコインや摩崖浮彫に見られる国王や神の冠意匠に焦点を絞って考察を試みてみたい。

## 1 クシャノ・ササン朝国王の王冠形式

古代にかぎらず国王像一般の重要な標識としては、王冠を無視することができないが、特にササン朝ペルシアの帝王像においては、王冠形式が帝王を特定する主要な造形要素となっていることは周知のことである。それに比べ、クシャノ・ササン朝の国王像については我が国ではほとんど知られていない。しかしながら、クシャノ・ササン朝の国王像の王冠もササン朝ペルシアのそれに劣らず多様性と独自性に富んでいる。王冠にゾロアスター教の神々の象徴を装飾する点においては、ササン朝ペルシアの帝王像と軌を一にするが、ササン朝ペルシアの帝王像の王冠装飾には見られない動物や植物が用いられている点がまず注目に値しよう。

王冠装飾に適用された動物については、獅子の頭部、猛禽(鷲、鷹、隼?)の頭部や翼、牡羊角で、植物としてはいわゆる「アーティチョーク」(蓮華?)、アカンサスないしパルメット(?), 蔦文が用いられている。さらに、ササン朝ペルシアの帝王像の王冠装飾に共通するものとしては、城壁冠(極めて少ない)、球体装飾(corymbos)、リボン・ディアデム、三日月、アーケードなどが知られている。

獅子頭についてはササン朝の帝王の王冠装飾には用いられていないので、特筆に値するが、第2代目の国王ペーローズ1世(245-270?, J・クリブの編年による、以下国王の在位年代はJ・クリブの編年に従う)と第3代目の国王オルムズド1世(270-295)が用いている(Cribb 1990,p.171)。ゾロアスター教では獅子は悪獣(アーリマンの眷属)に分類されているが、ササン朝のバフラム2世(276-293)の皇太子バフラムの帽子(kolah)の装飾に用いられているので、王家の見解にはやや異なっている部分があったのであろう(ナクシェ・ルスタムのバフラム2世謁見図浮彫参照、Hinz 1969,p.201,pls.119-20)。たとえば、西アジアでは古来、獅子を正当な王権の象徴として玉座の脚の装飾に用いたり、あるいは太陽(ミスラ神?)のシンボルとして用いている(Tanavoli 1985,pp.9-39)。一方、A・D・H・ビヴァールは、この皇太子像を、バフラム2世に反旗を翻したクシャノ・ササン朝のオルムズド1世と見なしているが、この見解には同意しかねる(Bivar 1979,p.327)。

猛禽については、頭部(くちばしを含む)と翼のある形式を初代の国王アルダシール1世(2世)(230-245)が用いているが、第4代目のオルムズド2世(295-300)は翼のみを用いている。前者のタイプはササン朝のシャープル1世(241-271)が皇太子の時に発行した銀貨や、イラン南部のフィールーザーバードの騎馬戦闘図浮彫(アルダシール1世の対アルサケス朝戦勝図)に描写された皇太子シャープル(1世)の頭部に見られるが、ただし、翼を欠いている(Ghirshman 1975,pl.XXII-figs.2,4;Göbl 1971,pl.2-no.34;Hinz 1969,pl.54; von Gall 1990,fig.3,pl.6)。後者のタイプはバフラム2世の王冠に見られる。いずれにせよ、猛禽はゾロアスター教の戦勝神ウルスラグナ(Verethragna=Varahran=Bahram)の象徴である。

牡羊の角は2本用いられているが、クシャノ・ササン朝の最後の国王バフラム、あるいはキダラ・クシャノ朝のバフラムないしペーローズが用いている(Carter 1985,pls.49-34,50-39,40;Cribb 1990,pls.II-10, III-28,VIII-77,79)。牡羊の角2本を国王の頭部に装飾した例はアレクサンダー大王の胸像(プトレマイオ

ス 1 世やリュシマコスの発行したコイン、角はエジプトのアモン・ゼウス神の象徴)に既に見られる (Smith 1988, pl.74)。ササン朝の帝王の王冠には、このような装飾は見られないが、王妃の冠には 2 本の牡羊の角を飾った例が知られている(印章、銀製皿)。また、アミアヌス・マルケリヌス著『*Rerum Gestarum*』第 XIX 節によれば、シャープール 2 世はアミダ(トルコ南部)の攻略の時(360 年)、牡羊の頭部を飾った冠をかぶっていたというが、これはシャープール 2 世ではなく、クシャノ・ササン朝ないしキダラ・クシャン朝のパフラム王であった蓋然性が大きい(Bivar 1979, p.328; 田辺 1994, pp.56-75)。エルミタージュ美術館蔵の「国王騎馬猪狩文鍍金銀製皿」に描写された国王も同じく 2 本の牡羊の角を飾った王冠をかぶっているが、このパフラム王であると見なされている(Herzfeld 1930, pp.22-23, fig.10; Erdmann 1936, p.199, fig.1)。いずれにせよ、牡羊はウルスラグナ神の象徴でかつフワルナー(Xvarnah、富、幸運、吉祥)の象徴である。

植物文で最も多いのは、いわゆる「アーティチョーク」でほぼ全ての国王が用いている。ただし、アーティチョークそのものは中央アジアには存在しなかったため、これはインド佛教美術に典型的な蓮華などの花を基にして創造した宝相華のようなものであろう。これはササン朝帝王の王冠に典型的な球体装飾(天空、宇宙を象徴=諸王の王、星、太陽、月などに匹敵する存在)に相当する。

アカンサスないしパルメットの変形したような植物文は、アルダシール 1 世(2 世)、ガンダーラを支配したといわれるパフラム王(キダラ・クシャン族?)の王冠に見られる(Carter 1985, fig.1)。また、同王の王冠には蕁状の植物を左右対称的に球体装飾の左右に配した例がある(Seipel et al., 1996, p.137, fig.126; Göbl 1993, pl.22-K1, pl.37-Wahram 7)。これはササン朝帝王の一对のリボン・ディアデムに相当するが、ササン朝の帝王像でリボン・ディアデムが左右対称的に描写されるのはカヴァード 1 世(484-531)のコインのみに見られる現象である(Göbl 1971, pl.XI-185-191)。

城壁冠(アフラ・マズダ神の象徴)はシャープール 1 世以後、ササン朝帝王の定型的な王冠となったが、クシャノ・ササン朝では殆ど用いられておらず、わずかに初代のアルダシール 1 世(2 世)の銅貨のみに見られる。

以上、クシャノ・ササン朝の国王の王冠の装飾を概観したが、王冠本体の形式が「平たい」点に最大の特徴がある。ひとつはその側面にアカンサスないしパルメット文の変形した文様を配したタイプで、アルダシール 1 世(2 世)、ガンダーラを支配したといわれパフラム王(キダラ・クシャン?)の王冠がそれに相当する。もう一つのタイプはアーチないし三角形を連ねたような文様を配したもので、ペーローズ 1 世、ペーローズ 2 世(300-325)、オルムズド 2 世(295-300)、パフラム王(キダラ・クシャン)などの王冠がそれに相当する。冒頭で述べた「王侯騎馬虎狩文鍍金銀製皿」の王侯の冠に類似するのは、この「平たい王冠」なのである。この平たい王冠がクシャノ・ササン朝の国王の典型的な王冠形式であったから、それに何らかの特定の意義が存在したのではなかろうかと想定することができよう。以下において、その意義の解明を試みたい。

## 2 アナーヒター女神の王冠

第 1 章で挙げた国王の平たい王冠の意味を考察するうえで極めて重要な資料がクシャノ・ササン朝の国王オルムズド 2 世の金貨(図 3a)の裏面(図 3b)に見られる(Cribb 1990, pl.I-5; Tanabe 1996, fig.10; Marshak/Grenet 1998, fig.4; 田辺 1995, 挿図 22)。この裏面には向かって左にオルムズド 2 世の立像、右に椅子に腰掛けた女神の像が描写されている。両者の中央には一羽の鳥が配されている。この鳥はヘラート及びメルウで発行されたペーローズ 1 世とオルムズド 1 世の銀貨(図 4a)では祭壇(図 4b)によって描写されているが、国王の王冠の鳥翼が象徴する軍神ウルスラグナ(Verethragna)に関係するのかもしれない(Cribb

1990,pp.180,191,pl.VI-58,59)。J・クリブと F・グルネの解説によれば、パフラヴィー文字銘は向かって左に、'whlmzdy MLKA(オルムズド王=オルムズド 2 世)、右に'n'hyt zy(アナーヒター、定冠詞)、中央上方に MROTA(貴婦人)とあるという(Cribb 1990,pp.184-85)。しかしながら、パフラヴィー文字銘に詳しい山内和也氏に尋ねたところ、MROTA ではなく MRKTA と読むほうが適切であろうという。さらに MRKTA なる言葉は MLKTA というアラム語のイデオグラム(ideogram)と同じで、ペルシア語の"bâmbishn"(=queen)ないし"bânug"(=dame)を意味すると教示された(MacKenzie 1971,p.17; Gignoux/Gyselen 1989,p.879)。ただし、MROTA にせよ MRKTA にせよ、これらはアナーヒター女神の称号にすぎず、この女性がアナーヒター女神像であることには変わりない。この銘により、この女神はアナーヒターで、王権を神授していることが判明しよう。注目すべきは女神の冠形式である。側面から見た形は、上方がやや幅が広い末広がり、図 1 の国王の王冠形式(図 2)と同一である。残念ながら冠の側面の文様が明白ではなく、アーチを連ねたアーケードの有無も確認し難い。このような冠をかぶったアナーヒター女神の上半身像がオルムズド 2 世が発行した銅貨(図 5a)の裏面(図 5b)にも刻印されている。この上半身像がアナーヒター女神であることは、同じような平たい冠をかぶっていることから判明するが、さらにこの銅貨の裏面に刻印されたパフラヴィー文字銘を判読すると、'n'hyta(向かって右側)、MROTA ないし MRKTA(向かって左側)と記されていることから明らかである(筆者所有の銅貨 2 点の銘を総合して判読した)。その側面には三角形の様な文様が連続しているが、これらは城壁冠の三つの矢狭間(以下図 6a、9a、11a 参照)を簡略化して表現したものか、或いはアーチを変形したものか、断定が難しい。この文様に形式が酷似した三角形を三個連ねた興味深い冠をかぶった王侯風人物が、アフガニスタン北部のディリベルジン・テペの都市遺跡の第 16 号室から発掘された壁画に見られる(Kruglikova 1979, figs.17,18)。その文様の頂には玉飾りがついているが、三角形の内側にはパルメットないし樹木が見られる。それゆえ、この三角形は植物に関係深いとも解釈できよう。

このオルムズド 2 世の在位年代については、従来多くの研究者が言及しているが、筆者はそのいずれにも全面的に賛成できない。まず、クシャノ・ササン朝のコインに関して本格的な研究を創始した E・ヘルツフェルトは、ササン朝の帝王バフラム 2 世(276-293)の時代にサカスターン(現シースターン)を統治したオルムズド王と比定し、その在位年代を 276-284 年と推定している(Herzfeld 1930,pp.26,47,fig.17, pl.IV-24a)。A・D・H・ビヴァールはクシャノ・ササン朝のオルムズド 2 世(Kushanshah Hormuzd)と見なし、ササン朝の帝王オルムズド 2 世(303-309)の在位に並行すると考えている(Bivar 1956,pp.24-25,34, pl.III-29)。Ch・ブラナーもクシャノ・ササン朝のオルムズド 2 世と見なし、ササン朝の帝王バフラム 2 世の在位にほぼ並行する 276-284 年にサカスターンを統治していたと推定しているが、一方、この国王の鷲翼冠はササン朝の帝王オルムズド 2 世のそれを模倣したと述べるなど、その記述に矛盾がある(Brunner 1974,p.156,pl.XXIV-6)。鷲の頭部と翼を飾った王冠は既にクシャノ・ササン朝の初代の国王とも考えられるアルダシール 1 世が銅貨の肖像において用いている(Carter 1985,p.223,pl.47-2; Göbl 1984,pl. 114-no.1029; Cribb 1990,pl.III-17)。この他ササン朝では、シャープール 1 世(241-270)が皇太子の時に既に用いていることはフィールザーバードのアルダシール 1 世騎馬戦闘図浮彫や銀貨の胸像によって明らかである(ただし、翼を欠く、Ghirshman 1975,figs.2-5; von Gall 1990,Abb.3,Taf.8-a; Göbl 1971,pl.2-no.30)。M・L・カーターはクシャノ・ササン朝のオルムズド 2 世と見なし、ササン朝の帝王シャープール 2 世(309-379)の治世の前半に並行する 328-330 年頃の短期間に在位したと推定している(Carter 1985, pp.249-250,pl.48-17)。R・ゲープルは、オルムズド 2 世と特定することは避けているが、その在位についてはシャープール 2 世の統治した 356-379 年の間においている(Göbl 1984,pls.116-1091,180)。V・G・ルコーニンは、ササン朝帝王ヤズドガルト 1 世(438-457)の王子と推定し、オルムズド 3 世と命名し、

450-457年に在位したと述べているが、この年代は、クシャノ・ササン朝の創始を4世紀半ば(356年頃)に設定しているため、余りにも遅く肯定し難い(Lukonin 1967, p.31, table III)。

以上挙げた諸見解は図3の金貨がまだ発見されていない時のものである。この新発見の金貨を調査したJ・クリブは、クシャノ・ササン朝のオルムズド2世と見なし、その在位年代を295-300年としているが、その前提には、この王はササン朝の帝王ナルセー(293-303)の時代に皇太子として、クシャノ・ササン朝の国王を務めたという推測があるようである(Cribb 1990, pp.184-185, pls.I-5, III-25)。

J・クリブのクシャノ・ササン朝コインの編年論に対して筆者はほぼ同意するが、発行の開始と終焉の時期については、若干異なる。たとえば、第二代目のペーローズ1世の在位をJ・クリブは245-270年(ササン朝の帝王シャープール1世の在位年代に並行)と推定しているが、筆者は、その銅貨裏面の意匠はササン朝の帝王アルダシール1世の典型的な意匠(聖火壇と玉座の合成)であるから、むしろアルダシール1世の在位年代に並行する224-240年頃に想定すべきと考えている。さらに、このパフラム2世金貨の発行年については、裏面の国王の上着の裾の独特な形式を考慮して、この国王はシャープール2世の在位の後半(325年頃以降)に存在したと推定しているため、若干異なる(田辺 1995, pp.103-108; Tanabe 1996, pp.499-500)。それゆえ、シャープール2世がクシャノ・ササン朝を356年頃(シャープール2世によるアミダ攻略の前)に併合したとすれば、このオルムズド2世の在位は4世紀の前半に想定すべきであろう(Ammianus Marcellinus, *Rerum Gestarum*, ch.XIX, 1, Loeb Class.Lib.vol.I, p.471)。

この他、アナーヒター女神は、クシャノ・ササン朝の初代アルダシール1世が発行した大型銅貨(図6a)の裏面(図6b)にも刻印されている。この場合、アナーヒター女神はアーチの下、椅子に座り正面を向いた姿で描写されている点においてオルムズド2世の金貨(図3b)銅貨の場合(図4b)と異なっている。このアーチはイワーン型のアナーヒター神殿を象徴しているのであろう。この銅貨に刻印された女神の冠形式はコインが小さいこともあって必ずしも明らかではないが、E・ヘルツフェルトやR・ゲーブルの復元模写(図7)を参照すると、この女神は矢狭間を3個重ねたササン朝系の城壁冠をかぶっている(Herzfeld 1930, p.30, fig. 21; Göbl 1984, Table VIII, Varia A, 1028)。このような形式の冠は女神殿の建物の最上部に矢狭間を配置してあったことを反映していると解釈できよう。無論、V・G・ルコーニンのようにササン朝初代の帝王アルダシール1世及び王妃デナクの冠を借用したものと見なす見解もある(Lukonin 1967, p.26)。しかし、ナクシェ・ラジャブのアルダシール1世叙任式図浮彫に描写されたデナク王妃はこのような城壁冠をかぶっていないので、その可能性は絶無に近いであろう(Hinz 1969, p.126, pl.57; Vanden Berghe 1984, p.66, fig.9)。王妃の冠が牡羊の一对の角と豊穡の象徴たる植物(ザクロ、葡萄の葉)で飾られていた例は知られている(シャープール3世の王妃ヤズダーン・フリー・シャープールの印章、パリ国立図書館蔵: The Waters Art Gallery 蔵の銀製皿、Inv.no.57.709)。

一方、このアルダシール1世の銅貨に関しては、筆者所蔵の2点の銅貨及び公表されている写真資料で女神の名前を記したパフラヴィー文字銘を確認しようとしたが、文字が不鮮明な資料が殆どを占めているので、アナーヒターと明記した文字を筆者は確認することはできなかったことを付言しておこう(無論、アナーヒター女神説を否定するものではない)。山内和也氏にも筆者所蔵の2点の銅貨の銘の判読をお願いしたが、やはりアナーヒターと読むのは難しいとのことであった。同氏によると末尾の二文字は「ta」ではなく「ad」ではないかという。とすれば、ゾロアスター教の正義の女神で、クシャノ朝ではリシュトー(Rishto)と呼ばれたアルシュタード=アシュタード(Ashtād=Arshatād)女神が即座に想起されるが、しかしながら、この女神はギリシア風のヘルメットをかぶったアテナ女神、あるいはローマのミネルヴァ女神、ローマ女神の姿(例、バーミヤーンの35メートル大仏天井画)でクシャノ朝以後描写されていたから、像容の点で一致しない(Göbl 1987, pl.23; Grenet 1987, figs.1-7)。このようなわけで、アルダ

シール 1 世の大型銅貨の裏面に刻印された女神像をパフラヴィー文字銘からは残念ながら確定することはできなかった。ただし、E・ヘルツフェルトの模写(図 7)を見ると、問題の女神の向かって左手に「アナーヒター=ana..a」と読めるようなパフラヴィー文字が 5 ないし 6 個記されている。少なくとも最初と最後の文字は「a」であるので、アナーヒターという銘が刻印されている蓋然性が大きいことがわかる。しかしながら、全く不思議なことに E・ヘルツフェルトはこの女神像をアフラマズダ神(Ohrmuzd)と記している(Herzfeld 1930, pp.30, fig.21, p.41, coin no.3)。この女神像がアナーヒターであることは Ch・ブラナーが既に述べているが、彼は参照した大型銅貨のパフラヴィー文字銘は解読できないと記しているので、図像の外観からこのように推定したのであろう(Brunner 1974, p.148, pl.XXIII-1)。

この女神がアナーヒターであるとパフラヴィー文字銘を解読したと称して初めて明言したのは、R・ゲープルであるが、彼はアルダシール 1 世の別のタイプ(国王の冠には鷲が裝飾されている)の大型銅貨裏面に刻印された女神像の銘文にアナーヒターなる文字を発見したこと、及びこれらの二つのタイプの女神像がいずれもササン朝の帝王ナルセー(293-303)の王権神授図浮彫(ナクシェ・ルスタム)に描写されたアナーヒター女神(図 8)が矢狭間 3 個よりなる「城壁冠」をかぶっている点を論拠としている(Göbl 1984, pp.82-83, pl.114-no.1029, pl.172-no.1029/4)。一方、V・G・ルコーニンはこの女神を太陽神ミスラと見なしているが、ササン朝、さらにクシャノ朝美術に描写されたミスラ神は旭光型の頭光背で荘厳されているから、それを欠くこの女神像はミスラ神ではありえない(Lukonin 1967, pp.26, 29)。事実、クシャノ・ササン朝ではクシャノ朝のミスラ神の図像的伝統を継承し、アルダシール 1 世はその金貨(図 9a)の裏面(図 9b)に、旭光型の頭光背で荘厳され、城壁冠ではなく平たく丸い帽子のような冠をかぶり、ディアデムと剣を持つミスラ神座像を刻印してするのである(Cribb 1990, pl.III-14)。ほぼ同様な図像が同王の大型銅貨(図 10a)の裏面(図 10b)にも刻印されている(Herzfeld 1930, p.29, fig.20, pl.I-2; Cribb 1985, fig.50)。また、ミスラ神立像はクシャノ・ササン朝のオルムズド 1 世がメルウで発行した金貨(図 11a)の裏面(図 11b)に刻印されているが、それにも旭光型頭光背が見られるのである(Cribb 1990, pl.VI-61; 田辺 1992, p.12, no.50; 田辺・前田 1999, p.210, nos.117, 118)。それゆえ、ミスラ説は肯定できない。

以上のような考察の結果、筆者は上述した E・ヘルツフェルトの模写図の銘文(図 7)を参照すれば、この女神はアナーヒターと見なすのが妥当と考える。

このようにクシャノ・ササン朝においては、初期のアルダシール 1 世の大型銅貨裏面(図 6b)にササン朝系のアナーヒター女神が描写されているが、後期のオルムズド 2 世の銅貨裏面裏面(図 5b)と金貨(図 3b)には全く別のタイプのアナーヒター女神像が刻印されているのである。立像、座像の相違、持物の相違(剣?と笏杖)はともかく、冠はなぜ、このように変化したのであろうか? ササン朝の摩崖浮彫に描写されたゾロアスター教の神々(アフラマズダ、ミスラ、アナーヒター)は独自の冠形式を有し、かつ神々は特定の動物、植物で以て象徴されていた事実を想起すれば、冠形式及びその裝飾は女神を特定する重要な標識であったはずである(Göbl 1971, pp.7-9)。それゆえ、いたずらにその形式が変化するとは考えられないのである。何か特別な理由があったに相違ないのである。この問題を考察するには、ササン朝においてアナーヒター女神がどのように描写され、かつその冠形式がどのようなものであるか参照する必要がある。それゆえ、次章でササン朝のアナーヒター像の冠を概観しておこう。

### 3 ササン朝美術のアナーヒター女神像の冠

アナーヒター女神の冠については、聖水の女神アナーヒターに捧げられた讃歌『アーバーン・ヤシュト』の第 30 節に述べられているが、それによると、「その冠は百の星にて荘厳され、黄金製にして、八光を有し、(車輪?)の形で、飾り帯(リボン状のディアデム)にて装われ。。。と記されている(Darmesteter

1883,p.83;岡田 1982,p.135)。ただし、「八光」と訳出されている部分(ashta kaozda)について H・ユンカーは「八つの突起=矢狭間」、「車輪=ra θ a」を「防御された都市=城壁」と推定し、「八光を有し、(車輪?)の形」の箇所を「8 個の矢狭間で装飾された城壁冠」と解釈している(Junker 1926,p.876; K. F. Geldner 1926 も同様に訳しているという、Ringbom 1957,p.5)。筆者も八光という解釈は間違いと思う(旭光型の冠はミスラ神のそれ)。F・ヴォルフは Ch.パルソロメーに従って「八つに分割された」と訳出している(Bartholomae 1904,p.261,achtteilig; Wolf 1910,p.181)。L・I・リングボムは H・ヴェラーの独語訳を採用して「八つに分割された」(achtfach teilte)と解釈しているが極めて妥当と思う(Ringbom 1957,p.4)。また、ササン朝の城壁冠は 3 個の矢狭間よりなるものであるから、8 個の矢狭間はササン朝のアナーヒター女神の冠形式には該当しない。一方、「八光」は「八つの側面」、すなわち、八面体とも解釈できる(Shahbazi 1983,p.261)。とすれば、それは八つのアーチよりなるアーケードと解釈するのがより妥当であろう(古代イランでは 7 が聖数であったが、物体を等分するには奇数よりも偶数の方が容易であろう)。

いずれにせよ、『アーバーン・ヤシュト』にはアナーヒター女神が城壁冠をかぶっているとは明記されていないのである。ところで、ササン朝美術におけるいわゆる「アナーヒター女神像」の比定に関しては、造形遺物中心に今まで多くの研究がなされているが、その大半は「半裸体の女性像(=踊り子、召使い、ダエナー)」を根拠なくアナーヒター女神とする伝統的な謬見である(江上 1985; Egami 1974; Shepherd 1980)。このような謬見を信奉しないためにも、ササン朝美術におけるアナーヒター女神像の比定については慎重に考察せねばならない(アナーヒター女神全般に関しては、Encyclopaedia Iranica, vol.I, fasc.9, pp.1003-1011 参照)。

ササン朝の最も古いアナーヒター女神像の例は実は、オルムズド 1 世(272/273)のドラクマ銀貨の裏面に刻印されている(Göbl 1971,p.20,pl.3-no.38; Nikitin 1996,p.101,fig.87)。このコインの例は法量が極めて小さいので、不明な点もあるが、アナーヒター女神は両足まで隠れる丈の長いドレスをまとい、両手でバルソムを持って立っている。頭髪は巻き毛で、額には「三つの矢狭間からなる城壁冠」が識別できるので、記述したクシャノ・ササン朝のアルダシール 1 世の銅貨裏面に刻印されたアナーヒター女神像(図 6b)の冠と同一型式であることが判明する。それゆえ、これらの城壁冠が既に言及したナルセー王の叙任式に描写されたアナーヒター女神の冠へと継承されたことが判明しよう。この浮彫によれば、明らかに女神はいわゆる矢狭間 3 個よりなる城壁冠(図 8)をかぶっている。このような城壁冠はササン朝の初代の王アルダシール 1 世(224-240)の王冠にも見られ、第 2 代目のシャープール 1 世(241-270)において同王の定型冠(図 12)となったが、アルダシール 1 世の時代にアフラマズダ神の定型冠として用いられ以後ササン朝末期まで帝王の定型冠として踏襲されていった(ナクシェ・ルスタムのアルダシール 1 世騎馬叙任式図浮彫、以後シャープール 1 世、バフラム 1 世などの騎馬叙任式図浮彫やターキ・ブスターンの叙任式図浮彫に描写されたアフラマズダ神像を参照)。このように、3 世紀の半ばでは矢狭間 3 個よりなる城壁冠はアフラマズダ神の冠として用いられていたが、オルムズド 1 世のコインやナルセー王の叙任式図に見られるように、アフラマズダ神に特定されたものではなくむしろ、アナーヒター女神も含む神一般の冠として用いられていたことが判明しよう。無論、神に城壁冠を用いたのは、逆にアルダシール 1 世などの王冠を神のそれに適用したからに他ならない。というのは、ササン朝美術において神の擬人像を制作した場合、その図像の特色、外観は国王や王妃のそれらをモデルとしたからである。矢狭間よりなる城壁冠に関しては、アケメネス朝のダリウス 1 世の王冠に既に矢狭間(ピストゥーンの戦勝図浮彫参照)が装飾され、かつ同朝の金貨や銀貨に刻印された「英雄像=祖先神」の定型冠として矢狭間を連ねた城壁冠が用いられていたから、それを採用したものと思われる(ヒッタイト、新アッシリア美術などそれ以前の城壁冠の例については、Metzler 1994)。

このナルセー王の叙任式図浮彫に描写されたアナーヒター女神の城壁冠(図 8)で注意すべき点は、冠の最も下方に横列をなしている文様(小さなアーチを連ねたように見える)である。アルダシール 1 世やシャープール 1 世、さらにアフラマズダ神の城壁冠(図 12)にはこのような文様は施されていない。つまり、この文様によって、この冠を国王やアフラマズダ神のかぶる他の城壁冠と区別していることが判明する。この文様は、恐らく、この女神と向かい合っているナルセー王の王冠(図 8)の文様と同じもの(アーケードとは断定できないまでも、少なくとも柵等の囲みであることは明白である)であろう(上述したクシャノ・ササン朝のアナーヒター女神の城壁冠では図像が小さいためか、このような文様は描写されていないようである)。

ササン朝の摩崖浮彫においてアナーヒター女神が描写された次の例は、300 年も後のものしか知られていない。イラン北西部のターキ・プスターン大洞の奥壁上段に描写されたアナーヒター女神は左手で水差しを持ち、右手でディアデムを掲げているが、その冠はもはや城壁冠ではなく、アーチを連ねた平たい“アーケード冠”(図 13)である。そして、この“アーケード冠”には、植物を象徴するような糸杉の木ないし何らかの植物の葉(パルメット?)が各々のアーチに挿入されているのである。これらの樹木ないし植物はアーケードにあったと見なすよりもむしろアーケードで囲まれた建物の内部にあったと想定したほうが妥当であろう。つまり、このアーケードの特性を暗示するために、内部の樹木ないし植物をアーケードの外面に移して描写したと筆者は推定するのである。

この浮彫の制作年代については、ペーローズ王(457-484)、ホスロー 2 世(591-628)と異論があるが、筆者はアルダシール 3 世(628-630)以後と推定している(田辺 1982, pp.90-92; Tanabe 1984, pp.51-53)。いずれにせよ、その制作年代は 7 世紀の前半である(Peck 1969; Gropp 1970)。すなわち、ナルセー王の時代から 7 世紀にかけて、アナーヒター女神の冠の形式に大きな変化がおこったのである。それは果たしていつ頃であったのであろうか?

それはササン朝の初期から中期の帝王の王冠形式を見ると判明する。ターキ・プスターンのアナーヒター女神の冠(図 13)に酷似するのはシャープール 3 世(383-388)の王冠(図 14)である。この王冠は平たく、かつ明らかに“アーケード冠”であり、各々のアーチに樹木ないし葉が挿入されている。それゆえ、このシャープール 3 世の王冠はアナーヒター女神の王冠(“アーケード冠”)と見なしてよいであろう。

さらに時代を遡ると、類似の王冠(図 15)をナルセー王自身がかぶっていることがわかる。この王冠も同じく平たく、かつ“アーケード冠”である。各々のアーチの中には樹木も葉も描写されていないが、植物と関係しているのは、冠の上方に 3 本の樹木(糸杉?)が存在することによって明らかである。この樹木はアーケードの上に植木したのではなく、恐らく、アーケードに囲まれた池(聖水)のほとりに生えているもので、もっと多数の樹木を暗示しているよう(3 という数字はゾロアスター教では神聖吉祥の数、善語・善思・善行の三戒などに関係する聖数)。或いはボウルカシャ湖中のフカイルヤ山にあるといわれる水の源泉(アナーヒター女神の住処)の傍らに生えているといわれるサエーナ樹(saena)、ガオカレナ樹(gaokarena)、ヴィスポービシュ樹(vispobis)であるかもしれない。いずれにせよ、樹木は大地の豊穡、それにとって必要な水(池、川)を暗示しているのである(灌漑と耕地を増大するのはアナーヒター女神の職能の一つ)。アーケードはその神聖なものを囲っている施設であって、いわばパエリダイダ(楽園 Paradise)を意味していることが判明しよう(Ringbom 1951, pp.86-91, 381-387, figs.28-30, 33, 35, 110-111, 115; 1957, pp.16-26, figs.13-15, 18)。

この二人の帝王の“アーケード冠”で注意すべき点は、両王とも樹木を欠く単純に平たい“アーケード冠”も併用している事実である(Göbl 1970, pl.5-nos.73-74, pl.8-nos.127-128)。とすれば、樹木のない平たい“アーケード冠”もアナーヒター女神に関係する冠と見なしてもよからう。すなわち、ナルセー王の

場合には、このタイプの王冠(図 16)は金貨の胸像にも用いられている。金貨はナルセー王の即位を記念して発行されたものであるから、二つのタイプの王冠の早期のものである。それゆえ、二つ目のタイプの王冠に樹木が3本付加され、その伝統がシャープール3世の王冠形式(図 14)へと変化発展していったと見なすことができるのである。このようなわけで、樹木や葉を欠く単純な“アーケード冠”もアナーヒター女神に関係する冠と見なしても問題はなかろう。この推論は、単純な“アーケード冠”をナルセー王自身が、アナーヒター女神から王権を授与される同王の叙任式図(図 8)においてかぶっていることから裏付けられよう。このようなわけで、平たい“アーケード冠”はアナーヒター女神を象徴する冠と結論することができるのである。

結局、ササン朝ではナルセー王がアナーヒター女神を格別に信仰していたことは、主神アフラマズダに代わってこの女神を叙任式図の王権授与神に用いたことから明らかであろう(アナーヒターの名はパイクリの碑文にも登場)。ただし、この浮彫ではこの女神は平たい“アーケード冠”をかぶらず、伝統的な城壁冠をかぶっている。何故、このような矛盾が存在するのであろうか? “アーケード冠”をかぶっていないこの女性像はアナーヒター女神ではないのであろうか? 事実、この女性像はアナーヒター女神ではないとする見解もある。たとえば A・Sh・シャーバジーによれば、この女性像はシャープール1世の娘でナルセー王の王妃となったシャープール・ドゥフタク2世であるという(Shahbazi 1983)。しかしながら、上述したアルダシール1世の銅貨裏面(図 6b)に刻印されたアナーヒター女神の冠も矢狭間3個よりなる城壁冠であるから、この女性もアナーヒター女神である蓋然性が極めて大きく、A・Sh・シャーバジーの見解が間違っていることがわかる。またササン朝の初期においては、王妃や王子は神を象徴する動物の頭部を冠の飾りとしていたから、この女性像は王妃とは考えがたいのである(例、ナクシェ・ルスタムのバフラム2世謁見図浮彫、同王発行のドラクマ銀貨の表裏の王妃、皇太子の胸像を参照)。更に、上述したように、この女神の城壁冠の下部にはアーケードを暗示する文様が配されている。このアーケード文はクシャノ・ササン朝のオルムズド2世の銅貨裏面(図 5b)のアナーヒター像の冠に見られる。それゆえ、この文様によって装飾されたこの城壁冠は伝統的な城壁冠(アフラマズダ神など)はなく、アナーヒター女神のための特別な城壁冠(アーケード付き城壁冠)であることがわかるのである。それゆえ、ササン朝ではナルセー王がアナーヒター女神を初めて王冠の装飾意匠として用いたといっても差し支えなかろう。おそらく、古典古代においては城壁冠が都市の守護女神(テュケ=Tyche)の定型冠であり、かつササン朝初期では神一般の冠であったので、それを欠く冠は女神のそれにはふさわしくないと考えられたのであろう。それゆえ、その伝統がこの女神像に採用された結果、城壁冠が用いられたが、さらに女神という観念を強調鮮明にすべく“アーケード冠”が付加されたと推定されよう。

一方、国王の王冠にはこの女神の新しい形式の冠要素の中から新しい要素(“アーケード冠”)そのものだけが採用されたともいえよう。或いは、ナルセー王の“アーケード冠”を女神の城壁冠に付加したともいえよう。いずれにせよ、ナルセー王の王冠は前代過去の帝王の全ての冠型式とは全く異なる異例のものである。このように、ナルセー王の王冠からは三個の矢狭間が除去されたのであろう。このように、神像には古くからの伝統、国王像には新しいモード・意匠が採用されて両者を対比する手法は、この浮彫に限らず、シャープール2世(309-379)がターキ・ブスターンに制作せしめたいわゆる「アルダシール2世」の叙任式図浮彫にも見られるのである(田辺 1985, fig.1、国王とアフラマズダ神の上着の形式の相違参照、田辺 1995, pp.96-101, fig.20)。

さらに、ナルセー王の時代にアナーヒター神殿の形式に変化があったのかもしれない。アナーヒター神殿はナルセー王叙任式図浮彫のあったナクシェ・ルスタムの東の古都イスタフルにあったとされ、ササン朝の祖先はその神殿の神官であったといわれる。ナルセー王はこの神殿で即位式を行った蓋然性が

大きい(Wikander 1946, pp.52ff, 148ff; Chaumont 1964)。この場合、アナーヒター女神は豊穡多産の象徴というよりもむしろ王権を授与する職能を有した女神として祀られていたのであろう。そして、このイスタフルのアナーヒター女神殿の正面がアーチ状のイワーン(iwan)形式のものであったので、その伝統に直結した伝統的な城壁冠(建物の上部に矢狭間を配置したもの)を用いたとも推測できよう(イワーンと女神の関係は上述したアルダシール 1 世の銅貨裏面、図 6b 参照)。あるいは、K・V・トレーヴェルが推測しているように、周壁にアーチ形の龕を数個配した 6 角ないし 8 角形の建物であったかも知れない(Trever 1969)。これに対して、新しい神殿形式はアーケードを周囲に巡らし、その中心に池(聖水)を設置するもの(イラン北西部のタフティ・スライマーンの例を参照)であったとも推定できよう(Ringbom 1951, pp.51-56, 92-117, figs.15, 18, 36)。このような形式の女神殿は L・I・リングボムが想像復元(図 17、ただし、アーチの上の植木には筆者は賛同できない)を試みているが、王権神授よりもむしろ豊穡多産を象徴する機能が顕著であるといえよう。ナルセー王の叙任式図浮彫における二つの形式の冠の並存はアナーヒター女神のこのような二つの職能を反映していると解釈できるし、またアナーヒター女神の冠がアフラマズダに代表される城壁冠から独自の冠へと変化する過渡期にあったのがナルセー王の時代と位置づけることができよう。

以上のような考察の結果、ナルセー王の単純な“アーケード冠”をもアナーヒター女神を象徴する冠とみなすことができるのであり、それゆえに、それを「アナーヒター冠」と別称しても差し支えなからうという結論に至るのである。とすれば、それとクシャノ・ササン朝の“アーケード冠”とはどのような関係にあったのであろうか？ 次にこの問題を考察してみよう。

#### 4 クシャノ・ササン朝国王の“アーケード冠”

第 1 章で挙げたクシャノ・ササン朝の国王の王冠の中から平たい冠をかぶっている国王を探すと、まず、ペーローズ 1 世の銀貨表(図 18)に刻印された胸像を挙げるができる。この例では表面が摩滅しているため、やや識別しがたいかもしれないが、同王の発行した大型銅貨の胸像(図 19)に見られる王冠を参照すれば、冠の下方にはアーチが並び、各アーチの上端に玉(頭髮の巻き毛)がついた“アーケード冠”であることがわかる(Herzfeld 1930, pl.I-5a, 5b, 6a, p.24, fig.14; Lukonin 1967, p.24, fig.4, Table I-c; Brunner 1974, pl.II-2; Göbl 1984, pls.114-no.1030, 118-nos.1112, 1115-1117, 120-no.1123; Carter 1985, pls.47-5, 6, 50-37; Cribb 1985, figs.40, 41:1990, pls.IV-32, 33, VI-58)。R・ゲーブルのカタログを参照すると、同王が発行した小型の銅貨には、アーケードのみで上端に玉を欠く例も存在するが、これは恐らく頭髮を省略したものであろう(Göbl 1984, pl.119-nos.1118, 1119)。それゆえ、ペーローズ 1 世のコインに描写された平たい冠は基本的に、ササン朝のナルセー王やシャープール 3 世の“アナーヒター冠”(図 14-16)と同一であるといえよう。とすれば、その前後関係が問題となるが、ペーローズ 1 世の王冠には樹木ないし植物文が欠落している点を考慮すると、形式学的にはペーローズ 1 世の王冠が先行しているといえることができる。

しかしながら、ペーローズ 1 世の銅貨裏面にはアナーヒター女神は表現されておらず、通常はその代わりに「高位・高所の神」(OAPZOOAND IAZADO=varzavand yazado、図 4b の向かって右の座像)の胸像が聖火壇の上に描写されている(Göbl 1984, pls.118-no.1112; Cribb 1985, fig.40)。この神名を初めて解読したのは H・W・ベイレイであるが、以後この神は風神であることが解明された(Bailey 1954, p.14, note 21; Humbach 1975; 田辺 1992)。ただし、同王発行の一部の銅貨(図 20a)には、クシャノ朝の代表的な女神であったナナー女神の胸像(図 20b)が聖火壇の上に配されている。これがナナー女神であることは、頭部の三日月冠及び周囲のギリシア文字銘(BAGO NANO)によって疑問の余地がない(Cribb 1985, fig.41:1990, pl.IV-31)。それゆえ、ペーローズ 1 世はナナー女神をも信仰していたことが判明しよう。

ナナー女神に関してはクシャン朝の代表的な女神(バクトリア語で  $\alpha\mu\sigma\alpha\ \eta\alpha\eta\alpha$ , lady Nana)であったことがアフガニスタン北部のラバータク出土のギリシア文字銘文から判明しているが、クシャン朝のコインにも頻りに刻印されている(Sims-Williams/Cribb 1995/96, pp.78-79, 90, 93; Göbl 1984, pls.167-68)。この女神がアナーヒター女神と同一であるか否かという問題は従来多数の学者によって詮索されてきたが、武内律志(1998)の論文から明らかなように、本来両女神は別々の存在で、中央アジアにおいても図像的には習合し混同されることはなかったと思われる。無論、習合していなくとも、ペーローズ1世がナナー及びアナーヒターの両女神を信仰していた可能性は否定できない(シャープール2世はナナイア女神を信仰していたともいわれる、Wikander 1946, p.53)。

しかしながら、両女神が接近しなかったわけではない。その一つの例は上述したホルムズド2世の金貨裏面(図3b)である。この金貨のアナーヒター女神は左手に合弓を持っている。この弓はギリシアの女神アルテミス(ローマのダイアナ)の弓に由来するか、或いはゾロアスター教の雨神ティシュトリヤの弓矢に関係づけることができる。一方、クシャン朝のコインにおいても、フヴィシュカ王が弓矢と矢筒を持つテイロー(=ティシュトリヤ)神を金貨に刻印しているが、またナナー女神も弓矢を持つ姿で刻印された例が1点のみ現存する(Göbl 1984, pls.167-Nana 2, 2a)。ナナー女神が弓矢を持つのは一般的に考え難いので、フヴィシュカ王の金貨ではテイローと記すべき銘文を間違えてナナーと記した蓋然性が極めて大きい。それゆえ、このアナーヒター女神の持つ弓はナナー女神ではなく、アルテミス女神に由来すると見なすほうが妥当であろう(アナーヒター女神とダイアナ=アルテミス女神との習合については、Wikander 1946, p.70; Plinius, *Naturalis Historia*, V, 135; Aelianus, *De natura animalium*, XII, 23, 中野定雄他訳, 1992, 第1巻, p.275)。ところがB・マルシャックとF・グルネは、アケメネス朝以来、両女神は同一視されたと考え、オルムズド2世の金貨に刻印されたアナーヒター女神像(図3b)及びペーローズ1世の銅貨のナナー女神像(図20b)をその例証として挙げている(Marshak/Grenet 1998, p.8)。筆者はこの銅貨のナナー女神は弓矢を持っていないし、またこの金貨と銅貨は発行者も発行年代も異なるから、両コインに刻印された両女神を同一視するのは妥当ではないと思う。ただし、ペーローズ1世(図21a)は“アーケード(アナーヒター)冠”をかぶり、ナナー女神の他に、アルドクショー女神(図21b)、ウェーショー風神(高位高所の神)などクシャン朝の著名な神々を比較的多数コイン裏面に守護神として採用しているから、ナナー女神をアナーヒター女神と同一視して信仰していた可能性は無視すべきではないかも知れない。とすれば、このペーローズ1世は個人的にこの二人の女神を同一視していたかも知れないし、或いはそのような習合が一時的にクシャノ・ササン朝宮廷に存在したかも知れない。しかしながら、図像的には両女神は全く相異なるので、両女神が完全に習合していたとはいえないであろう。

さらに、もう一つクシャン朝のナナー女神とアナーヒター女神ないしクシャノ・ササン朝王家との関係を示唆するものに、オルムズド1世の王冠の定型装飾である獅子頭(図4a, 10a)が存在する。獅子はインド・ギリク王のアガトクレス、パンタレオンが発行した方形銅貨やインド・パルティアの王ゼイオニゼス、カラホステスの銅貨裏面に単独像が刻印されている(Bopearachchi 1995, nos.151-160, 169-171, 974, 975; 1998, pls.13, 14)。前者においては、コインの表に刻印されたディオニューソス神(胸像)とペアーになっているようであるから、あるいはこの神の眷属を表しているのかも知れない。また、その獅子は3弁の花を右手に持つ女性像ともペアーとなっている。この女神ないし女性像にはインドのラクシュミー女神などと共通する特徴が見られないのでインド系の髪格ではなく、筆者はむしろ、ディオニューソスの眷属たるマイナス(メナド)と解釈すべきであると思う。後者のコインにおいては、獅子はインド産こぶ牛とペアーをなしている。

このような前例があるが、サパドビゼス王が西暦前後に発行した銀貨に刻印されている獅子の単独像は、ギリシア文字で2カ所に NANAIA と明記されているから、西アジア(例、ハトラ)から中央アジアに伝播したナナー女神の眷属(乗り物)として用いられていることが判明する(Azarpay 1976; 田辺 1996)。無論、特にクシャン朝においては、獅子の背に横座りしたナナー女神像が流行し、フヴィシュカ王やカニシュカ 3(2)世の金貨裏面や印章に刻まれている(田辺 1992, pp.36-37; 1996, figs.8-12)。そして、この獅子の背に横座りするナナー女神像が5-8世紀のソグド美術にまで継承され、ピャンジケントで発行された銅貨にナナー・パンチュ(ピャンジケントの女主人)とソグド語・文字銘が刻印されたり、或いはヤグザルテス河北方のソグディアナで発行された銅貨に獅子像が刻印されている事実を考慮すると、中央アジアにおけるナナー女神と獅子との関係の強固さを無視することはできないであろう(Smirnov 1981, fig.31, pp.50-51, pp.371-383)。とすれば、クシャン朝とソグド美術の中間に位置するクシャノ・ササン朝においても、獅子とナナー女神の関係が知られており、それがオルムズド 1 世の獅子頭冠(図 4a、10a)に反映していると推定することもできよう。獅子に関しては、ササン朝時代ないしゾロアスター教では一般的に虎、豹、ハイエナなどの「狼種」に属する悪獣と見なしていたが、ナクシェ・ルスタムのバフラム 2 世(276-293)の謁見図浮彫では王子の一人(後のバフラム 3 世?)が獅子頭で装飾された帽子(kolah)をかぶっているので、少なくとも王家では必ずしも邪悪視されたわけではない(Anklesaria 1956, p.189)。また、既述したように、獅子は太陽神ミスラの象徴としてバルティア時代以来用いられている(Tanavoli 1985, pp.9-39; Trever/Lukonin 1987, p.56)。

あるいは獅子がアナーヒター女神を象徴する動物として用いられていた可能性がないわけではないので、獅子頭がアナーヒター女神の象徴であったとも考えられなくもない(バルティア時代、エイマイス王国のアナーヒター神殿で獅子を飼育していたというアエリアーヌス(Aelianus)の記録参照、一方、バルティア時代のメソポタミアにおけるナナ・ナナイア=アルテミス=アルラト=イシュタルの習合・混同に関しては、Le Dider 1965, pp.295-296; Invernizzi 1998 参照、ポロス冠を戴き、弓と盃を持つアルテミス=ナナイアの像はエリュマイス王国カムナシキレス朝発行の銅貨に多い、Augé 1979, pls.5-6, 8-10)。

このように、アナーヒター女神とナナー女神の接点は確かに存在するが、ナナー女神の象徴たる額の=三日月がアナーヒター女神像には欠落し、逆にアナーヒター女神の“アーケード冠”をナナー女神がかぶっていない点を考慮すれば、両者の習合はむしろ否定すべきであろう。いずれにせよ、この習合問題は微妙であるので、これ以上の詮索はここではしないでおこう(ナナー女神とアールマイティ・シャンドゥラーマタ女神との習合問題については、Bailey 1967; Azarpay 1976)。

一方、ペーローズ 1 世の前の国王アルダシール 1 世の銅貨の胸像(図 5-a)を参照すると類似の王冠をかぶっているように見えるが、他の例や V・G・ルコーニンによる復元図を参照すると、アーケードのように見える部分は矢狭間3個を連ねた城壁冠であることが判明する(Lukonin 1967, p.24, fig.3; Göbl 1984, pl.114-no.1028; 1993, pl.64, nos.832, 836)。これは、この銅貨裏面に描写されたアナーヒター女神の冠が同様な城壁冠であることに対応しよう。

次にペーローズ 2 世のコインを挙げることができよう。この国王が発行した金貨の全身像(図 22)及び銅貨の胸像から明らかなように、この国王の王冠はナルセー王の王冠(図 8、16)に酷似していることが

判明する。ただし、頭上にコリュンボス(球体)があるので、銀製皿の王侯の冠(図2)やペーローズ1世の王冠形式(図19)とは異なる。この後に続くバフラム1世の王冠も同じく平たいが、しかしアーチが側面に描写されていないので、「アーケード冠」とはいい難い(Cribb 1990, pls.I-II)。

## 参考文献

- Augé, Ch.  
1979 "Monnaies d'Elymaïde", Augé, Ch./Curiel, R./Le Rider, G. (eds.), *Terrasses sacrées de Bard-e Néchandeh et Masjid-i Solaiman. Les trouvailles monétaires*, Paris, pp.35-162.
- Azarpay, G.  
1976 "Nanâ, the Sumero-Akkadian Goddess of Transoxiana", *Journal of the American Oriental Society*, vol.96, pp.536-542.
- Bailey, H.  
1954 "Hârahuna", *Asiatica, Festschrift F.Weller*, Leipzig, pp.12-21.  
1967 "Saka Ssandramata", *Festschrift für Wilhelm Eilers*, Wiesbaden, pp.136-143.
- Bartholomae, Ch.  
1904 *Altiranisches Wörterbuch*, Stuttgart.
- Bivar, A.D.H.  
1956 "The Kushano-Sasanian Series", *The Journal of the Numismatic Society of India*, vol.XVIII, pp.13-42.  
1979 "The absolute chronology of the Kushano-Sasanian Governors of Central Asia", *Prolegomena of the Sources for the History of Pre-Islamic Central Asia*, J.Harmatta (ed.), Budapest, pp.317-332.
- Bopearachchi, O.  
1996 *Pre-Kushana Coins in Pakistan*, Karachi.  
1998 *Sylloge nummorum graecorum, The Collection of the American Numismatic Society, part 9, Graeco-Bactrian and Indo-Greek Coins*, New York.
- Brunner, Ch.J.  
1997 "Sceaux de femme à l'époque sassanide", *Archaeologica Iranica et Orientalis, Miscellanea in honorem Louis Vanden Berghe*, De Meyer, L./Haerinck, E./Gent, (eds.), pp.877-896.
- Göbl, R.  
1971 *Sasanian Numismatics*, Braunschweig.  
1984 *Münzprägung des Kushânreiches*, Wien.  
1987 "Rishto was sonst?", *Litterae numismaticae Vindobonenses*, Bd.3, pp.169-183.  
1993 *Donum Burns, DieKkusanmünzen in Münzkabinett Bern und die Chronologie*, Wien.
- Grenet, F.  
1987 "L'Athèna de Dil'berdzin", *Cultes et Monuments Religieux dans l'Asie Centrale préislamique*, Paris, pp.41-45.
- Gropp, G.  
1970 "Der Gürtel mit Riemenzungen auf den sasanidischen Reliefs in den großen Grotte des Taq-I Bustan", *Archaeologische Mitteilungen aus Iran*, Bd.III, pp.273-288.
- Herzfeld, E.  
1974 "The chronology of the Sasanian Kushanshahs", *Museum Notes*, vol.19, pp.145-165.
- Carter, M.L.  
1985 "A Numismatic Reconstruction of Kushano-Sasanian History", *Museum Notes*, vol.30, pp.213-281.
- Chaumont, M-L.  
1964 "Où les rois sassanides étaient-ils couronnés?", *Journal Asiatique*, t.252, pp.59-74.
- Cribb, J.  
1985 "Some further hoards of Kushano Sasanian and Later Kushan coppers", *Coin Hoards*, vol.VII, pp.308-321.  
1990 "Numismatic evidence for Kushano-Sasanian Chronology", *Studia Iranica*, t.19, pp.151-193.
- Darmesteter, J.  
1983 *The Zend-Avesta*, part II, Oxford.
- Egami, N.  
1974 "On the Figure of the Iranian goddess Anahita as an example of the continuity of the Iranian culture", *Acta Iranica*, vol.1, Leiden, pp.221-228.
- Erdmann, K.  
1936 "Die sasanidischen Jagdschalen", *Jahrbuch der Preussischen Kunstsammlungen*, Band.57, pp.193-232.
- Geldner, K.F.  
1926 *Die zoroastrische Religion*, Tübingen.
- Ghirshman, R.  
1975 "Chapour Ier, Rois des Rois sans couronne", *Acta Iranica*, t.4, pp.257-267.
- Gignoux, Ph./Gyselen, R.  
1930 *Kushano-Sasanian Coins*, MASI, no.38, Calcutta.  
Hinz, W.  
1969 *Altiranische Funde und Forschungen*, Berlin.  
Humbach, H.  
1975 "Vayu, Siva und der Spiritus Vivens im ostiranischen Synkretismus", *Acta Iranica*, vol.4, pp.399-408.
- Invernizzi, A.  
1996 "Osservazioni in Margine al problema della religione della Mesopotamia ellenizzata", *Ancient Iran and the Mediterranean World*, E.Dabrowa(ed.), Krakow, pp.87-99.
- Junker, von H.  
1926 "Iranica", *Orientalische Literaturzeitung*, vol.29, pp.876-877.
- Le Rider, G.  
1965 *Suse sous les Seleucides et les Parthes, les trouvailles monétaires et l'histoire de la ville*, Paris.
- Lukonin, V.G.  
1967 "Kushano-Sasanidskoe Monety", *Epigraphika Vostoka*, vol.XVIII, pp.16-33.
- Marshak, B.I./Grenet, F.

- 1998 "Le mythe de Nanâ dans l'art de la Sogdiane", *Arts Asiatiques*, t.53, pp.5-20.
- Metzler, D.  
1994 "Mural Crowns in the Ancient Near East and Greece", *Yale University Art Gallery Bulletin*, pp.77-85.
- Nikitin, A. B.  
1996 "Iran zur Zeit der Sasaniden(224-651n.Chr.)", *Weirauch und Seide*, ed. by W. Seipel, Wien, pp. 99-107.
- Peck, E. H.  
1969 "The Representation of Costumes in the Reliefs of Taq-I Bustan", *Artibus Asiae*, vol. XXXI, pp.101-124.
- Ringbom, L. I.  
1951 *Gratiempel und Paradises*, Stockholm.  
1957 "Zur Ikonographie der Göttin Ardvi Sura Anahita", *Acta Academiae Aboensis, humaniera*, vol. XXIII, 2, pp.3-27.
- Schahbazi, A. Ch.  
1983 "Studies in Sasanian Prosopography", *Archaeologische Mitteilungen aus Iran*, Band.16, pp.255-268.
- Seipel, F.  
1996 *Weihrauch und Seide*, Wien, p.137, no.126.
- Shepard, D. G.  
1980 "The iconography of Anahita", *Berytus*, vol./XXVIII, pp.47-82.
- Sims-Williams/Cribb, J.  
1995/96 "A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great", *Silk Road Art and Archaeology*, vol.4, pp.75-142.
- Smirnov, O. I.  
1981 *Svodnyj Katakog Sogdijskikh Monet*, Moscow.
- Smith, R. R. R.  
1988 *Hellenistic Royal Portraits*, Oxford.
- Tanabe, K.  
1984 "Investiture of the upper part of the innermost wall", *Taq-I Bustan*, vol. IV, Sh. Fukai et al. (eds.), Tokyo, pp.51-60.  
1994 "Sasanian Apron-shirt and the date of the two marble statues of Surya from Khair khaneh", *La Persia e l'Asia Centrale da Alessandro al X secolo*, G. Gnoli et al. (eds.), Roma, pp.489-514.
- Tanavoli, P.  
1985 *Lion Rugs, The Lion in the Art and Culture of Iran*, Bazel.
- Trever, K. V.  
1997 "K voprosy o khramakh Bogini Anakhity v sasanidskom Irane", *Trudy Gosudarstvennogo Ermitaja*, t.7, pp.49-54.
- Trever, K. V./Lukonin, B. G.  
1998 "Sasanidskoe Serebro", *Sobranie Gosudarstvennogo Ermitaja*, Moscow.
- Vanden Berghe, L.  
1984 *Reliefs rupestres de l'Iran Ancien*, Bruxelles.  
Von Gall, H.  
1990 *Das Reiterkampfbild in der iranischen und iranisch beeinflussten Kunst parthischer und sasanidischer Zeit*, Berlin.
- Wikander, S.  
1946 *Feuerpriester in Kleinasien und Iran*, Lund.
- Wolf, F.  
1910 *Avesta, die heiligen Bücher der Parsen*, Strassburg.  
江上波夫  
1985 「ルリスタン青銅器とササン様式銀器におけるアナーヒター女神像について」『三笠宮殿下古希記念オリエント学論集』小学館、61-88頁。
- 岡田明憲  
1982 『ゾロアスター教 神々への讃歌』平河出版社。  
武内律志  
1998 「中央アジアにおけるナナー女神の性質」『古代オリエント博物館紀要』第19巻、55-71頁。
- 田辺勝美  
1982 「ターク・イ・プスターン大洞彫刻研究 図像学及びイコノロジー的試論」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第2号、61-113頁。  
1985 「アルダシール2世叙任式図とシャープール2、3世像の意義と制作年代」『オリエント』第28巻第1号、93-115頁。  
1990 「ガンダーラ美術に対するササン朝文化の影響」『日本オリエント学会創立35周年記念オリエント学論集』刀水書房、295-314頁。  
1992 「ウェーショー：クシャーン朝のもう一つの風神」『古代オリエント博物館紀要』第13巻、51-93頁。  
1994 「ローマと中国の史書に秘められたクシャノ・ササン朝」『東洋文化研究所紀要』第124冊、33-101頁。  
1995 「ガンダーラ美術後期の片岩彫刻とハイル・ハネー出土の大理石彫刻の制作年代」『東洋文化研究所紀要』第127冊、69-157頁。  
1996 「ソグド美術における東西文化交流 獅子に乗るナナ女神像の文化交流史的考察」『東洋文化研究所紀要』第130冊、177-213頁。
- 田辺勝美・前田耕作(編著)  
1999 『中央アジア』世界大美術全集東洋美術編第15巻、小学館。
- 中野定雄 他訳  
1992 『プリニウスの博物誌』雄山閣



図1 王侯騎馬虎狩文鍍金銀製皿、個人蔵

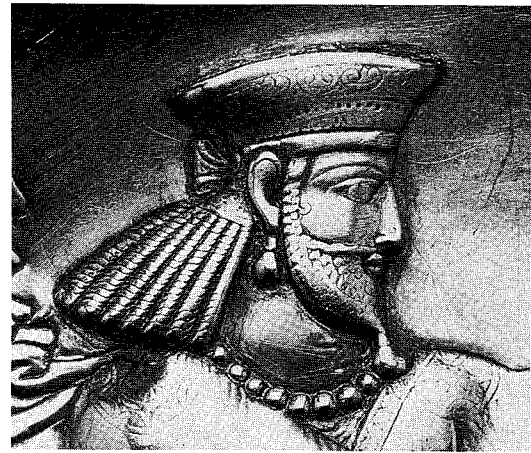


図2 図1の王侯の王冠



図3a オルムズド2世金貨表、大英博物館蔵



図3b オルムズド2世金貨裏



図4a オルムズド1世銀貨表、大英博物館蔵

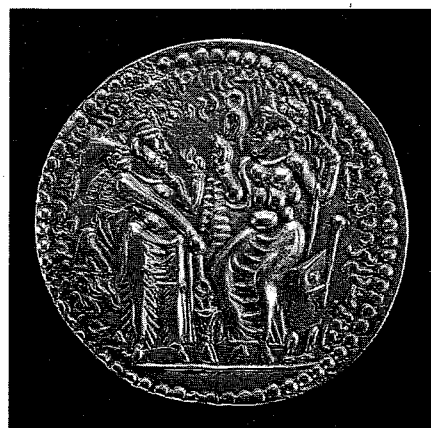


図4b オルムズド1世銀貨裏



図5a オルムズド2世銅貨表、筆者蔵



図5b オルムズド2世銅貨裏



図6a アルダシール1世銅貨表、筆者蔵



図6b アルダシール1世銅貨裏

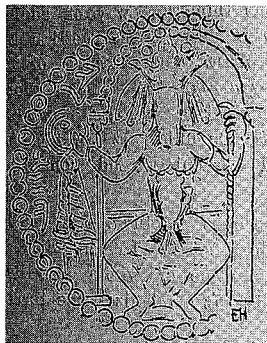


図7 アルダシール1世銅貨裏  
アナーヒター女神座像  
復元図 Herzfeldによる



図8 ナルセー王(左)、アナーヒター女神(右)  
叙任式図浮彫、ナクシュ・ルスタム

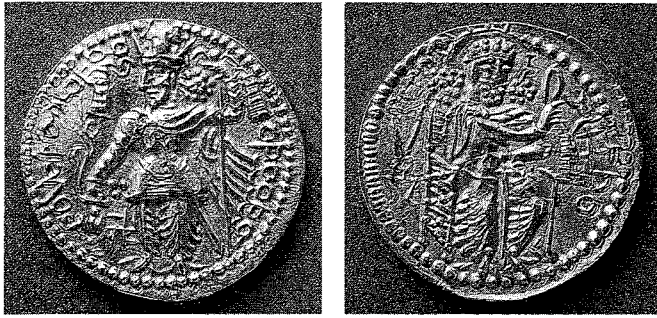


図9 a.b アルダシール1世金貨表、裏  
大英博物館蔵



図11a.b オルムズド1世金貨表、裏  
大英博物館蔵



図10a,b アルダシール1世銅貨表、裏 大英博物館蔵



図12 シャープール1世銀貨、筆者蔵

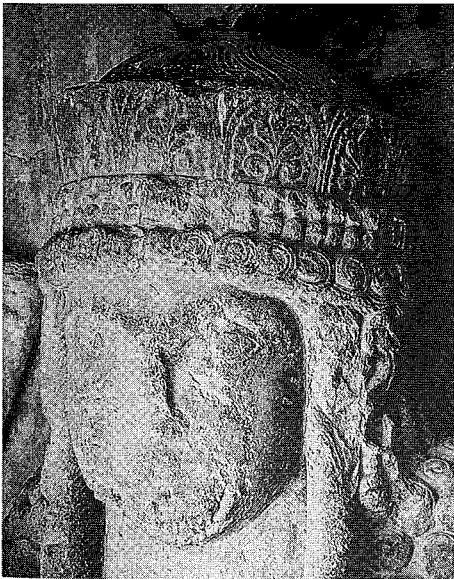


図13 アナーヒター女神像頭部、  
ターキ ブスターン大洞  
奥壁上段の叙任式図浮彫部分



図15 ナルセー銀貨表  
筆者蔵



図14 シャープール3世銀貨表  
筆者蔵



図16 ナルセー金貨表  
個人蔵

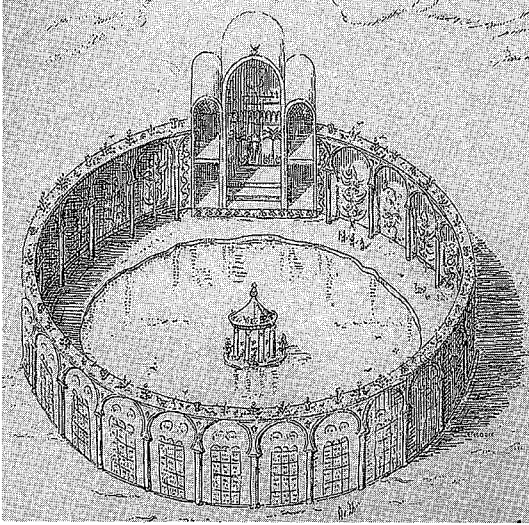


図 17 アナーヒター神殿の想像復元図  
Ringbom 1951 による



図 18 ペーローズ1世銀貨表  
大英博物館蔵



図 19 ペーローズ1世銅  
筆者蔵



図 20a.b ペーローズ1世銅貨表、裏  
大英博物館蔵



図 21a.b ペーローズ1世金貨表、裏  
大英博物館蔵

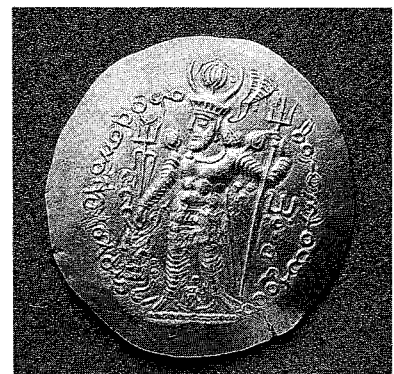


図 22 ペーローズ2世金貨表  
浜北、個人蔵